

3 五穀の始まり

あれは、察度王時代の何だが、久高にこの、南山での戦争の時に、自分の娘を山に隠してあったわけですよ、王様の娘。

「戦争のすむまで山に隠れておりなさい」と言っ何して。

戦争すんで、戦争負けたんです、南山の王様。そして、王様の言い分で、この娘に、

「もうあんたはここで生活はできんから、わしもどのようなになるか分からんから」と言っ、これは、女一人やつては危険だからと、百名シラタルというヤカー（王の使い）、使いを付けて久高に渡した。

それから、その百名シラタルはこの娘と夫婦になつて久高の生活を始めたわけです。それで、向こうに行つて、何も、野菜の種も何もないもんで。いえば、これは神の仕業でないかと思われんですよ。何かといえ、この百名シラタルが海岸に立つておると、丸い壺

が下から浮き上がってきて、取ろうとしても取られなかつたんですよ。それで、これは珍しいもんだと思つて、この女の方と夫婦になつておるから、

「これはわしが行つて取つたら取られなかつた」と言つて。何川であつたかね、川に行つて水浴びをして来て、そして、白い衣装を掛けてやつたから、その壺はまた浮き上がつて来てね、その壺は妻の方にはすぐわれたつて。

それを取つて開けて見たら、麦類、裸麦、また、粟なんかの種が入つて、それを植えて、はじめて農作物を作つて生活を始めたという。それが、これは神女になつておるわけですから、この女は。

類話

字豊原

金城カマド

字名城

新垣武登